

UGC が音楽ファンに与える影響とそのメカニズムの考察： 同質性と弱紐帯の観点から

轟田侑司（つるた ゆうじ）
東京理科大学大学院経営学研究科
柿原正郎（かきはら まさお）
東京理科大学経営学部

1. はじめに

先日の経営情報学会全国研究発表大会におきまして当賞を賜り、心より感謝申し上げます。本受賞は、これまで取り組んでまいりました研究活動が、学会の皆様にご一定の評価をいただいた証と受け止めており、自身の活動に対する大きな自信となりました。また、現在進めている修士研究をさらに深めていく上で、この上ない励みとなり、研究へのモチベーションが一層高まっております。今後も「若者だからこそその視点」を活かし研究活動に精進してまいります。

ご指導いただきました柿原先生、そして大会を整備くださった関係者の皆様、貴重なご意見をくださった先生方に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

2. 受賞した研究内容について

本研究は、デジタルプラットフォーム上に投稿される UGC（ユーザー生成コンテンツ）の活動が顕著な音楽分野に焦点を当てたものです。SNS 上にファンが投稿している UGC は、全く知らない人の投稿のはずなのに、なぜだか心理的な距離感が近いように感じる違和感を出発点に、UGC が音楽ファンにどのような影響を与えているか、またそのメカニズムはどのようなものかを、社会ネットワーク理論における「紐帯」と同質性の観点から分析ならびに考察しました。定性分析の結果、従来の理論では「強い紐帯は同質性を、弱い紐帯は異質性をもたらす」とされてきたのに対し、デジタルプラットフォーム上では、本研究で「同質性弱紐帯」と名付けた、両者が共存する新たな関係性の形態が観察されるこ

とを指摘しました。この「同質性弱紐帯」という特性は、ファンが（直接的な知り合いではない）他者の UGC に触れることを通じて、公式コンテンツにはない多様な解釈や新たな発見を得ることを可能にします。それにより、対象への理解が深まり、結果としてファン感情や心理的所有感（対象への愛着）を深化させるという、SNS 特有のメカニズムが働いていることを報告しました。本研究は、このデジタル時代における新たなファンコミュニティの発展プロセスの一端を示したものであり、今後の研究の萌芽として評価いただけたものと考えております。

3. 現在の研究活動について

現在、修士研究では、生成 AI の登場による情報探索行動の変化や、その利用意図に関する実証的な考察をテーマとして研究を進めております。

本受賞の研究で扱った UGC がユーザー間の情報伝播プロセスを変容させたように、生成 AI はユーザーと情報の関係性そのものを大きく変革する可能性を秘めていると考えています。当賞をいただいた研究の分析プロセスにおいても生成 AI を活用しましたが、その結果、分析作業の一部を効率化でき、本質的な「考察」という人間が担うべき部分により多くの時間を割くことができました。この経験からテクノロジーのインパクトを強く実感し、現在、生成 AI の普及の影響を最も強く受ける大学生の一人として、この分野に強い関心を抱いています。総務省（2025）の調査によれば、日本国内における生成 AI の利用率は未だ 26.7% と発展途上ですが、今後は個人の情報探索のみならず、購買行動などにも大きな影響を与えると予測されます。生成 AI を日頃から利用する「若者だからこそその視点」を研究に

付与し、この新たな技術が社会に与える影響を多角的に明らかにしていきたいと考えております。

4. 所属研究室について紹介

私が所属しております柿原正郎教授の研究室では、デジタル環境下における消費者の情報探索行動や意思決定プロセスについて、主に定量的アプローチを用いた分析を行っております。研究室全体としても、デジタル技術の進展に対して生活者の行動がどう変化するかに強い関心を持っています。デジタル技術は瞬く間に進化を遂げていて、例えば生成AI一つとっても、この1年で幾度も大きなアップデートが繰り返されています。私たちは、この急速な変化に対して柔軟に、そして「面白がりながら」探求していく姿勢を大切にしており、生成AIを活用した研究など、「テクノロジーを実際に使って考える」ことを重視しています。指導教員である柿原先生からは、研究テーマの設定から実証分析の手法に至るまで、常に本質を問う手厚いご指導をいただいております。

受賞論文で使用した代表的な文献

- ・片野浩一 (2021) 「ユーザー生成コンテンツの系統的レビュー」『明星大学経営学研究紀要』17, 1-16.
- ・Granovetter, M.S. (1973). "The strength of weak ties." *American Journal of Sociology*, 78(6), 1360-1380.
- ・McPherson, M., Smith-Lovin, L., & Cook, J.M. (2001). "Birds of a feather: Homophily in social networks." *Annual Review of Sociology*, 27(1), 415-444.
- ・Burt, R.S. (1992). *The Social Structure of Competition*. Boston: Harvard Business School Press.
- ・Pierce, J.L., Kostova, T., & Dirks, K.T. (2002). "The state of psychological ownership: Integrating and extending a century of research." *Review of General Psychology*, 7(1), 84-107.

また、「3. 現在の研究活動について」にて言及した文献は以下になります。

- ・総務省 (2025) 「令和7年版情報通信白書」, <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r07/html/nd112210.html> (2025年10月27日閲覧)。

略歴

靄田侑司 (つるた ゆうじ)

東京理科大学大学院経営学研究科経営学専攻 修士1年 柿原正郎研究室所属。
2025年3月に東京理科大学経営学部国際デザイン経営学科を卒業し、現在に至る。

柿原正郎 (かきはら まさお)

1995年 関西学院大学経済学部 卒業。
2000年 London School of Economics, MSc. in Information Systems 修了。
2003年 London School of Economics, Ph.D. in Information Systems 修了。
2003年 関西学院大学商学部 専任講師。
2007年 関西学院大学商学部 准教授。
2022年 東京理科大学経営学部国際デザイン経営学科教授 (現在に至る)。